

こいばな  
「恋話」

今日 あした

「こんな事があっても良いのだろうか」

玉鬘は部屋に入ってきた髭黒を見て絶句した。玉鬘の乳母、弁のおもとが髭黒を玉鬘の褥に招き入れたのだ。

やんごとなき女性はこんな場面でも抵抗できなかったのだろうか。

玉鬘とは源氏物語の登場人物で、光源氏の心を虜にし、物の怪に取り殺されてしまった、あの夕顔の娘である。

わずか三歳で母を失ったのだが今や二十二歳。

乳母に「姫様、姫様」と大切に見守られながら筑紫で教養深く成長したのだが、……。

そのように育ててくれた乳母の、弁のおもとを、髭黒の大将がかき口説いてこのような事態になったのであった。

A4の用紙にプリントされた源氏物語のテキストを持ち上げて、詩織は、ひらと振りながら、剽軽な顔を亜矢に向けて読み上げた。

「詩織ったら思わせぶりに……又、源氏物語の講座を受けているの？」

「亜矢も覚えているでしょう」

「詩織と一緒に聞いた講義？ 何となくね」

「えー、何となく、なのー」

「詩織の話聞いて思い出すから……、光源氏様のお話を、じゃあなくて髭黒のお話？」

「そうなのよ、信じられないことが起きるのよ。亜矢にも、一緒に悔しがってからおうと思つて誘つたのよ、亜矢だって、暇を持て余しているのでしょう」

「あなたみたいに独身貴族婆さんじゃないから、そんな余裕は無いわよ」

「そう思ったから亜矢の都合の良い日を聞いてこの宿を予約してあげたんじやないの」

「ありがとう！」

亜矢と詩織は同じ年の従妹同士。亜矢の父と詩織の母が兄妹で、二人の祖母が亜矢と同居していたので二人は姉妹のように仲が良い。

詩織が熱烈な光源氏ファンで、そんな詩織に誘われて、匝矢も四十代の頃、カ  
ルチャースクールに通ったことがある。

あれから二十年も経ってしまった。

匝矢の夫の勝男は優しい人だったが三年前に亡くなってしまった。詩織はずつ  
と独身で薬剤師をしているが、現在は店には週、二三日しか出ないで悠々自適の  
生活をしている。

「やっぱりこの年になると温泉が一番ね」

「詩織、ありがとう。箱根は東京から近いしね、最高！」

今度の旅行は、独身貴族の詩織のおごりだ。

「前に源氏物語の教室に行った時も『玉鬘』十帖だったでしょう」

「そうだったわね、詩織が私のことを玉鬘みたいだからって誘ってくれたのよね、  
母のことは、夕顔みたいだからって……」

「匝矢は忘れているかもしれないから、源氏物語の今やっている所をかいつま  
んで話すわね」

「お願いしまーす」

美しく成長した玉鬘は、筑紫で次々に求婚をされる。なかでも肥後の大夫の監  
(げん) という武骨で好色な男の強引な求婚から逃れて京に……。

神仏のご加護をと、石清水八幡宮に参詣し、その後初瀬の観音へと歩を進めた。  
そこで偶然にも、元夕顔の乳母だった源氏の女房の右近と玉鬘一行が出会った。

右近は、夕顔が亡くなった時、彼女と一緒にいたのに、亡くなったのも知らさ  
れず、源氏に連れて行かれてそのまま源氏の女房になってしまったのだった。

源氏は、右近を傍に置いて夕顔の思い出話をしたかったのだ。

右近も夕顔とその娘はどうしているのかいつも気にかかっていたので、何とか  
して探し出したいと思って参詣するところだった。本当に神仏のご加護だったの  
か、そこで会えたのだ。

源氏に知らせると、大喜び、美しい彼女を六条院に引き取り、六条院の秋の街  
に住ませた。玉鬘の父親の内大臣には知らせずに……。

「それにしても、父親の内大臣は若き日に懇ろだった夕顔に自分の娘がいたのに  
気にも留めていなかったのにはあきれれるでしょう」

憤懣やるかたなし！ という面持ちで詩織が言う。

「裳着の儀式が滞りなく済むと、源氏は玉鬘の将来のことを考えて、冷泉帝の内  
侍にするべく、着々と準備を進めたのよ。

内侍とは、帝の秘書のようなもので、公務員なので給料が出るの。その上、帝

と結婚することも充分予想されるのよ。

何ととっても冷泉帝は光源氏の血を分けた息子。光るが如く美しく、玉鬘にとってもこの上なくよい話の筈なのよ。

でもまだあるのよ。源氏は、表面上は玉鬘の父親代わりということになっていて、そこで美しい彼女のために、婿候補を厳選するのだけど……。

源氏自身が、昔の夕顔とそっくりの玉鬘にどんどん惹かれていくの。彼女の父親代わりを世間に知らしめているのだから、今更、恋人というわけには行かないのはわかってはいるのだけど……。

その源氏の彼女に対する恋心が玉鬘自身にびんびん伝わって、彼女は困り果ててしまうの。本当の父親じゃあないからねえ……。

「そんなあ、源氏の君には正妻の紫の上がいるじゃない」

「それはそれ、これはこれ。」

何ととっても当時の結婚適齢期は十六歳くらいだったでしょう、だから源氏は二十二歳の玉鬘の装着の儀式を急いだのよ。それでやっと玉鬘の父親の内大臣に夕顔の娘だと話して、無事、腰結いの役を果たしてもらったの。

それから本格的に、玉鬘の争奪戦が始まるのよ。」

「争奪戦！って、すごいわね。羨ましい！」

でもせっかく温泉に来たのだから、夕食前に入ってこない？」

「そうねえ」

巫矢に急ぎ立てられて、詩織も浴衣に着替え、宿の自慢の岩風呂に向かった。

「ところで、詩織はずっと独身を通したけど、結婚したい人はいなかったの？」

「それはいたわよ。でも、片思いだったり、結婚できない事情があったり……だから、結婚しなかったというより、出来なかったのかな」

「玉鬘みたいに、色んな人から言い寄られたりして……」

「フフツ、言えなくも無いわね」

「ええ、そうなの？ 言い寄られたりしているの……」

「まさかあ。」

それより、玉鬘の話ね。

装着の儀式が終わったら、帝は当然、いつでも求婚できると胸の内は見えない。内大臣の息子の柏木や、兄弟たちも、まさか玉鬘が姉だとは知らないの、せつせと恋歌を贈るの。源氏の弟君の兵部卿の宮は、奥さまを亡くされたばかりで、自分こそ本命だと、恋文にも力が入るのよ。

髭黒大将も、最初から求婚メンバーに参加していたのよ、でも誰にも注目されていなかった。それがレースの最後に来てラストスパートで他の競争手を抜き

去り優勝してしまつたのよ。

何といつても、誰よりも早く玉鬘の乳母を抱き込んで、まだ内侍になる前に、六条院の玉鬘の部屋に到達したのだから……。

さすが、紫式部さまよね。

予想外の展開で、この結婚、玉鬘は鐘馗様のような髭もじやの髭黒大将の顔立ちに面食らつたし、他の求婚者も困惑したのよ。

でも、彼は現在の皇太子妃の兄に当たる人物で家柄は申し分なし、近衛府の大将という社会的地位も申し分なく、玉鬘の婿になることに不足のない人であつて、誰も表立って反対することが出来ないところで、物語は面白く展開していくのよ。

「それで、詩織の方はどうなの？」

「どおつて……？」

近ごろやたらモテるような気がするの。ほら、私は薬剤師だから、お客様に色々相談されるのだけど、五十を過ぎてから、体調の悪い人から名指しで相談を受けることが多くなつたのよ。それより、奥さまを亡くされた人なんかから、それは熱心に誘われたりするのよ」

「えええ、で、好きになつちゃう人なんかいるわけ？」

「それは、相談に乗つたりしていると情も移るでしょう」

「結婚なんか、考えるの？」

「そうね、一度も結婚したことがないから、憧れみたいなものがあるかも知れない」

「わー、人生変わるかもね」

「なーんて、冗談よ！ そんな人がいたら、亜矢とじゃなくなつて、その人と温泉に入っているわよ」

「髭黒と玉鬘の話よ」

更に詩織のレクチャー。

「内侍になつた玉鬘に帝が言い寄るかも知れない、そう思うと髭黒は居ても立つても居られないのよ。そこで、自分の邸に玉鬘を早く連れて来ようと、準備をするの。それには今いる奥さんに出て行つてもらわなくてはならないでしょう、子供もいるのに……」。

「平安時代のやんごとなき女性は大変だつたのねー」と亜矢。

「えつ、私がつたいへんじゃあないとでも？」真面目な顔で詩織。

「やめてよ、しおり！」

二人は大笑い。何度も温泉に入り、夜が更けるまでおしゃべりに花が咲いたの  
でありました。

了(3280字)